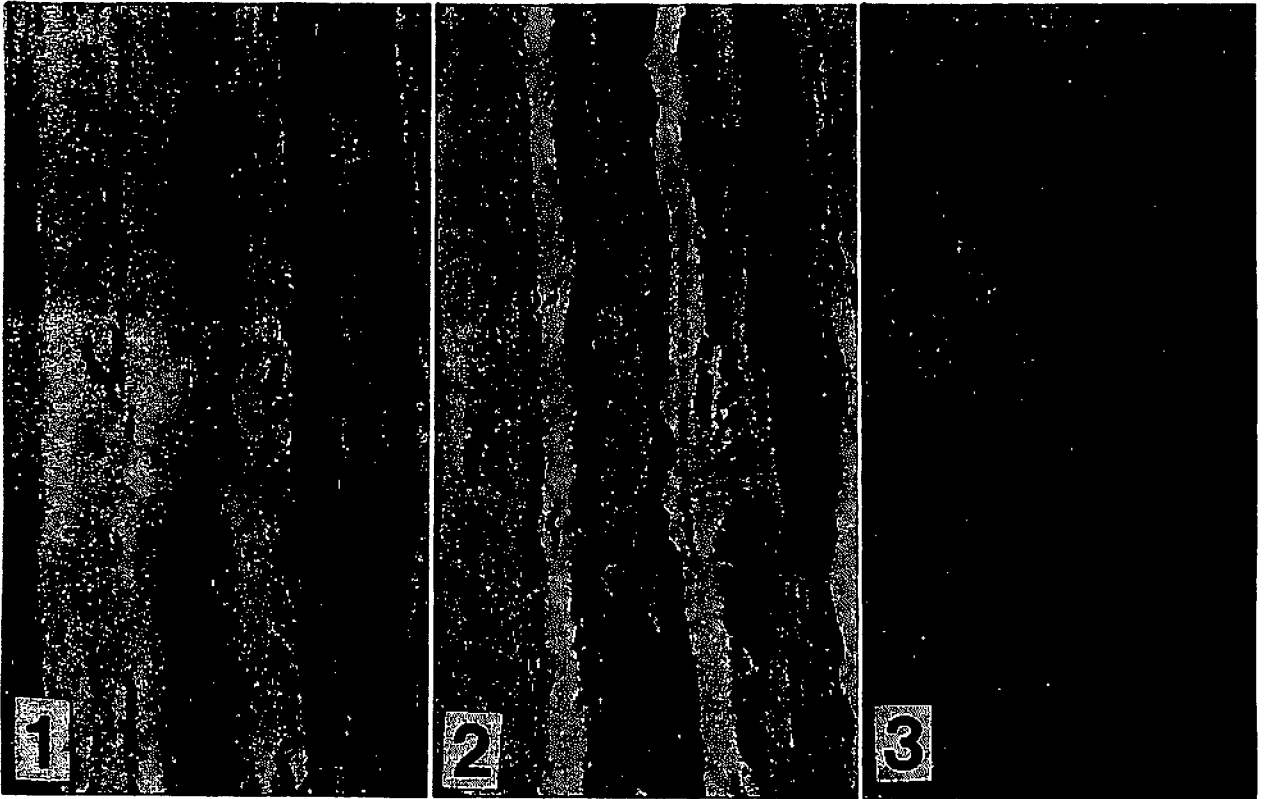


# 馬における特殊な筋肉変性の1例

帯広畜産大学家畜病理学教室出題——

第9回獣医病理学研修会 標本No. 134



この材料は14才、ベル系の牝馬で、臨床的に強直症と診断されて殺処分されたものである。解剖時に腔前庭に陳旧化膿巣が発見され、該部を微生物学教室に送って破傷風菌陽性の結果を得た。剖検記録を見ると、前記陳旧化膿巣の他に左右両肺の横隔膜前部における巣状肺炎、全身骨格筋の軽度の褪色及び硬化が目目されている。

こゝで問題とされたのはこの骨格筋の変化である。すなわち、採取した骨格筋は咬筋、胸骨下顎筋、深胸筋、背最長筋、深腎筋、大腿直筋、半膜様筋、中腎筋、長趾伸筋、腓腹筋、棘上筋、上腕三頭筋（長頭）、尺側手根伸筋更に肋間筋などであるが、量的に差はあっても写真1の如き変化が見られた。一般に筋繊維は萎縮性でありその筋繊維の中心部あるいは筋鞘に接してヘマトキシリンに淡染する部分が、随所に認められる。その部はPAS陽性を示す微顆粒～顆粒状の物質よりなっている（写真2）。所によっては間質に大型の明るい原形質に富む細胞よりなる集団があり、その胞体はPAS陽性を示す。このような筋変化の他に空胞（ズゲンIII、PAS陰性）

を容れたもの、塊状変性を示す筋繊維を散在する。一方、H-E標本で殆ど正常に見える筋繊維でも微細なPAS陽性顆粒を蔵するものもある（写真3）。なお、舌および横隔膜にも前記同様の病変が認められたが、心筋には見られなかった。

さて、このPAS陽性物質は唾液消化試験で消化されず主体はグリコーゲンではなくムコプロテインのようなものであろう。本例は前述の如く強直症と診断された殺処分馬であるが、教室保存材料で検討した限りではこの病との直接の結びつきはないようである。このような変化が如何にして生じるかは大きな問題であるが、果して筋繊維内（筋漿）から生じるか、間質から取り入れられたものであるか、今の所不明である。いずれにしても比較的稀な病変と見るべきであろうと考えられる。現段階では馬の横紋筋組織における萎縮を伴った特殊の変性像という程度の組織診断にして置き度い。

写真1 半膜様筋 ×220 H-E, 2 同連続切片 PAS, 3 深腎筋 ×500 PAS